

第 307 回 昭和の森自然観察会

水辺の生き物たち

木下順次(千葉市)

日 時:2017 年 7 月 9 日(日)10 時~12 時 天 候: 晴れ

参 加 者:大人 18 人、子ども 15 人 計 33 人 指導員 10 人

担当指導員:山下美佐子・木下順次

今月から昭和の森自然観察会は、夏の間午前中の開催となります。9 時 40 分の受付開始から参加者が現れはじめました。時間変更はしっかりと伝わっているようです。タモを持った親子連れやまだ小学校にあがる前と思われる小さな子供連れの家族が多く、ほとんどがリピーターです。今回のテーマは「水辺の生きもの」(「水の中の生きもの」ではないことに注意!)です。一生を水中に暮らす生きもののほか、生活史の一部を小川や池、湿地などに依存している生きものを「水辺」という一つの環境を軸に観察してみようという試みです。谷津の突き当りの湧水地点とため池から始まり、ショウブ田脇の水路を通り、水田をぬけて下夕田池に至る、水辺の生き物めぐりです。

2 班に分かれてそれぞれ水辺を目指しました。水辺に至る前にまずしておくことはトンボの観察です。台地の上部で観察できるナツアカネやノシメトンボを捕獲して観察しながら、環境によって見つかるトンボの種類が変化することをあらかじめ説明しておきます。また、水辺の生きものの代表のように思われているアマガエルも実は台地上で見つかる事、決して一生を水中で過ごしているわけではないことなどを知ってもらいます。

我々の班は、冒険広場からショウブ田に下りていよいよ本番開始です。早速あらわれる、トンボの種類が明らかに変化します。アカネ類からシオカラ類(オオシオカラトンボやシオカラトンボ)。さらには池の畔では、コシアキトンボ、ショウジョウトンボ、チョウトンボ、イトトンボ類など。ため池の泥の中にはさまざまな幼齢のヤゴも生息しています。

水辺の生きものを探すと、昆虫類、甲殻類、貝類、魚類、爬虫類、両生類、鳥類と生き物の多様性がぐっと増えます。特に、魚類はその他の観察会テーマではなかなか観察の機会のないものです。水の中という、観察者が気軽に足を踏み込めない環境に暮らす生きものも多いため、今回の観察会では事前にどれだけ生きものを捕獲して観察できるようにしておくかが肝心です。つまり、一日限りのミニ水族館です。

マツモムシ、コミズムシ、ガムシ、アメンボ類など水棲昆虫の水槽(実はバケツ)、アメリカザリガニの水槽(これもバケツ)、ヤゴの水槽(バット)、メダカ、ドジョウ類、ヨシノボリサワガニ、ヌマエビ、カワニナ、タニシ類の水槽(バット)、クサガメの水槽(昆虫ケース)、アカガエル、アオガエル、アマガエルの水槽(昆虫ケース)・・・

手作りのミニ水族館は、今一つ展示室のつくりが統一感に欠けるくらいはあるものの、参加者たちは実際に触ったり、観察ケースに取り出してじっくり観察したりと楽しんでくれたようです。

ところで、今回の観察会の下見は、参加したみんなで生きものの捕獲タイムとなりました。捕まえた生きものはサイクルセンターで一晩保管したのですが、メダカ、ドジョウの多くが死んでしまいました。安易な管理は生きものに負荷をかけてしまいます。魚類の扱いには特に注意が必要でした。捕獲するからには十分な手当てをしたうえで、観察会終了後は生きて元の自然に帰せるようにしなければならないと反省しました。